



ジンバブエ、英ヨークシャー、デンマーク出身の
ルームメイトと(左から2人目が筆者)

の交流を通じて、いろんな人の立場や主張、その背景を理解させていく環境を作り上げている。もちろん時には摩擦や学校への反発も起きるし、途中で自国へ帰る学生も若干いた。

私は曲がりなりにも卒業して日本へ戻ると、元の高校が三年生へ編入してくれた。さっそく期末試験があり、理系はほとんど零点で国語、社会も不可。しかし半年ほどの受験生活はACほどキツクなかった。勉強だけ、それほかの部分が棒暗記で片付くからだ。

日英両国で適当に授業をサボっていた私
が言うのもおこがましいが、UWCがデイスカッションや実験、フィールドワークを重視しているのは素晴らしいことだ。たとえば福井謙一先生は、著書「学問の創造」の中で「所与性」と「活字性」について述べておられる。活字による加工を通してではなく、森羅万象があるがまま直接的に観察し洞察を深めるべき、という趣旨である。日本の受験勉強とUWCの根本的な違いもこの辺にあると思う。

コミュニケーションで 苦勞したことが大きな糧に

大学卒業後は日本をベースに国際的な仕事をしたいと考え、銀行に就職した。UWCの経験が買われたようで、海外の資源開発・プラント建設案件など大型プロジェクトファイナンスや、外国政府向けのシンジケートローン等々やりがいのある仕事があった。AC同期の赤林富二君(日本生命)ともシ・ローン業務で頻りに顔を合わせたし、今思えば忙しいが楽しい日々だった。

しかしその後邦銀は合従連衡や国際業務の大幅縮小を余儀なくされた。私も自分の経験を活かすべく外資へ転職し、現在は欧米やアジアの会社を日系へ紹介する仕事を

している。個別企業にとっては社運を賭けるような場合もあり、日系・外資両サイドの立場を理解し、双方から信用されないと話にならない。私はACで信用されていないかったわけではないが、コミュニケーションで非常に苦勞したことが大きな糧となっている。

ところで日本でも昨今は銀行や証券会社が破綻する時代になり、年功序列、終身雇用制度も先行き不透明だ。すなわち、個人は安定性を失い自己責任を問われるが、逆に日系企業間でも移動性が高まり選択の自由が増えるということである。翻ってUWC卒業生の強みは、単に海外へ行っても大丈夫というだけでなく、既成概念にとらわれず外向きに自分の頭で考え、新しい環境に挑戦できる、ということだ。実際各方面でユニークなキャリアの人が多く、そもそも肉親の懸念や反対を押し切って留学した人も少なくないだろう。高校二年間の留学がさほどのリスクかどうかはともかく、UWCは、その後の人生の原点として多くの留学生に得難い体験を与え、力強い発射台になっていくと思う。卒業生の一人としてお世話くださった皆様に感謝しつつ、微力ながらUWCの活動に参加し恩返しをしたいと考えている。

内向き志向を捨て 外向きにチャレンジ

ＣＩＢＣ証券会社東京支店
投資銀行部長
エグゼクティブ・ダイレクター

中田一志
なかつた ひとし

一九七九年UWC英国アトランティックカレッジ(ACC)卒。八〇年灘高校卒。八四年京大法学部卒、日本興業銀行入行。八九年米UT(テキサス大学)オースティン・ビジネススクール卒。九八年ABN Amroへ転職し、二〇〇〇年からカナダ系のCIBC証券東京支店にてクロスボーダーM&A担当エグゼクティブ・ダイレクター。



▼スパルタ教育にびっくり

私はとにかく海外に出て広い世界を見た
い、という思いが強く、自分であれこれ調
べてUWCの留学制度を見つけた。学校英
語だけではなく、ラジオ講座、テープ、映
画、英字新聞、英会話学校などで勉強し、
気合いを入れて奨学生試験を受けた。だか
ら経団連から合格通知をもらった時ほど嬉
しかったことはない。ところがいざイギリ
スへ行ってみると、文化的背景の異なる学
生や先生との意思疎通は想像以上に困難
で、まさに共通言語がない、という状況だ
った。また日本で好き勝手に暮らしていた

私は、ACCのスパルタ教育にも驚き、辟易
した。

朝六時過ぎに起床、水泳で一日が始まる。
午前中は少人数の授業で頻繁に発言を求め
られ、午後は山岳・海難レスキュー活動あ
るいはボート、サッカー、クロスカントリ
ー等のスポーツに励む。夕方の授業と夕食
の後は自習または社会奉仕等の課外活動。
二十二時十五分までに四人部屋の自室へ戻
り、二十二時三十分消灯である。食事はま
さにイギリスの学生寮、という感じで、買
い物のできる村までは片道三キロあった。
二年間だけの学生はともかく、先生方がよ
くぞあんな環境に何年も耐えられたものだ、

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日
本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちと
の教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養
成するという理念を掲げるUWCの日本委員会とし
て、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にある
UWC傘下の高校に派遣し、すでに三八八名の卒業
生を輩出している。

と今ごろになって思う。

ACCでは短期のプロジェクとも頻繁に催
され、近隣コミュニティでのペンキ塗り、
盲人学校訪問等各种ボランティア活動、紛
争地の北アイルランド視察、救急処置のコ
ース等々多岐にわたった。一番印象に残っ
ているのは、重度の障害専門の病院へ一人
で泊まり込みのお手伝いに行った時のこと
だ。患者さんのトイレの世話もしなければ
ならず、予想をはるかに超えるハードな一
週間だった。意外に潔癖症の私は初日から
頭を抱えた。残念ながら当時の私はノブレ
スオプリージという言葉も知らず、薬ほど
も持ち合わせていなかった。

▼日本の受験勉強と UWCの根本的な違い

UWCの教育方針は、社会奉仕の何たる
かを身をもって体験させることにある。加
えてUWC各校では、世界各国から派遣さ
れている学生の共同生活や地域の人たちと